# 芸術新潮

Geijutsu Shincho

June 2019

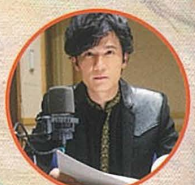
6

第2特集
2人のピアニストが見るウィーン

特集

# 時を超えるクリムト

GUSTAV KLIMT



INTERVIEW
稲垣吾郎

昭和25年1月20日第三種郵便物認可　2019年6月25日発行［毎月25日発行］5月25日発売　第70巻第6号

右／クロード・ワイズバッシュ《バイオリニスト》
油彩、カンヴァス　162×130cm
左上／クロード・ワイズバッシュ《アンサンブル》
油彩、カンヴァス　46×55cm
左下／クロード・ワイズバッシュ《騎手》
油彩、カンヴァス　162×130cm

さな部屋で一人制作に励んでいた。

「リヨンはパリよりは明るいけれど南フランスほどくっきりした明るさではなくて、いくらか薄い雲がかかったような空です。フサロ自身、絵の通りの人間で、とにかく優しいし、素朴でやわらかい感じの男ですよ。ワイズバッシュとはまるで両極端のような」

というそのワイズバッシュは、爲永氏が接してきた多くの画家たちの中でも随一の知性派だ。美術や文学の古典に通じ、歴史上の人物を主題にした作品も少なくない。何より際立つのはクラシックの演奏家を描いた作品の多さだ。自身ピアノを弾くなど音楽の素養があったのに加え、動きをともなう主題であるところがポイントだろうと爲永氏は語る。

「ワイズバッシュはもともとドライポイントやエッチングなど銅版画が専門。それが出発点だから油彩でもあまり色を使わない。せいぜいセピアにグレーにオレンジといったところでしょう。それだけにデッサン力は抜群で、動きの描写の巧さではロートレック以来じゃないかと思って惹かれたんです」

版画家として新聞小説や書籍に挿絵を提供し、また美術学校で版画を教えて生計を立てていたワイズバッシュが油彩に転向したのは、そもそも爲永氏の慫慂（しょうよう）によるという。

「版画だけではちょっともったいないような気がして、油彩の方へ来いって引っぱったんです。本人としても、版画にはない自由さがあるし、大きな表現ができるから嬉しかったんじゃないかな」

バイオリニストが弓を弾き飛ばしてしまった上右の絵などは、そうした大きな表現、動きの追究の果てに現われた、実際にはありそうもない架空の出来事の瞬間だろう。

開催中の4人展では、前号で紹介したコタボ、ギアマンに加え、詩情の人フサロ、動体描写の名手ワイズバッシュと、個性豊かな面々によるアンサンブルを楽しみたい。

## Claude Weisbuch
1927-2014

ワイズバッシュと爲永会長夫妻。

Exhibition

### 画廊と共に歩んだ4人展

**4月27日～6月16日▶ギャルリーためなが**

エコール・ド・パリを中心とした近現代のヨーロッパ絵画を紹介する画廊として時を刻んできたギャルリーためながの、開廊50周年記念展が開催中だ。画廊創業以来まさに共に歩み、現代具象絵画を代表する作家となったコタボ、フサロ、ギアマン、ワイズバッシュの4人の画業を、作品約40点で振り返る。

住所●東京都中央区銀座7-5-4
電話●03-3573-5368
開廊時間●10:00～19:00（日祝は11:00～17:00）
アクセス●東京メトロ「銀座」駅、JRおよび東京メトロ「新橋」駅より徒歩5分
URL●www.tamenaga.com

ジャン・フサロ《ベニスの祭》
油彩、カンヴァス　97×146cm

芸術新潮
特別企画

# フサロ&ワイズバッシュ
## 共に歩んだ画商が語る画家たちの素顔

## Jean Fusaro
Born: 1925

右上／ジャン・フサロ《ブーケとバイオリン》
油彩、カンヴァス　73×92cm
右下／ジャン・フサロ《パレルモの祭》
油彩、カンヴァス　97×130cm
左／アトリエで制作中のフサロ。

あるフランス人の評論家は、ブルーの使い方に特徴を見てだろう、「フサロブルー」という言葉を使ってフサロの絵を論じている。しかし、ギャルリーためながの爲永清司会長は言う。

「フサロはむしろ白ですよ。色という以上に光を意識していましたね」

もちろんどちらが正しいという話ではない。見る者それぞれが絵の中に何を捉えたのかということなのだから。

「画面全体にポエジーを感じますね。線ひとつとっても綺麗なはっきりした線ではなくて、繊細で揺れるような線でしょう。花の絵を描く場合でも、物としての花というよりはブーケがまとう雰囲気を描いていた。詩人の絵というのかな、作品によっては東洋の文人画に似た印象さえ受けます」

フサロは一貫してリヨンで活動してきた。後年は街を代表する画家として教会の壁画制作なども委嘱されるが、爲永氏が知り合った60余年前の若き日には、アパートの小